立石神社（上）　立石神社の姥石（下）

である。立石神社の名はこの立石より起こったものであろう。

村の言い伝えによると鎮守様は、姥石より生まれたといわれている。このことは『白河風土記』にも記されている。

姥石は、神社参道の階段中ほどの東側にある大きな岩で、二つの岩が重なり、割れ目があり、女性を象徴している。また社の裏の立石は男性を象徴している。これを村人たちは古くから、天地創造の神、伊奘諾、伊奘丹尊に見立てて信仰したのであろう。

その後、姥石から出た御神体は、伊奘諾、伊奘丹尊の御子、大日霊女貴、即ち天照大神を祭神として祭ったと思われる。神社には、松、杉、樅などの大木がうっそうとしているが、明治年間の台風をまともに受けて、大木が相当倒れたといわれる。昭和二十　年、神社拝殿再建の折、伐採した樅の大木は三人で抱えるほどの太さがあった。

（話者　古川　明）